

専門職に聞く『第1種滅菌技師』

中央材料室 第1種滅菌技師 岡部 巖 主任

# コメデイカル

医療機関で各種器材の滅菌業務に従事するプロフェッショナルが滅菌技師(技師)だ。厳しい感染リスク管理の下、医療現場における患者の安全を守る裏方の役割について、日本医療機器学会認定資格である第1種滅菌技師の岡部巖氏に聞いた。

## 医療器材の滅菌業務 岡部巖氏

—滅菌業務の概要を知りたい。  
クーパー(はさみ)、セッシ(シセット)など、手術、外来、入院の現場で使用する医療器材はたくさんある。使った物を他の患者に再び使えるよう、滅菌するのがわれわれの仕事だ。  
一九七〇年代は病棟の夜勤ナースが詰所で行っていたところが多いと聞く。しかし、一九八〇年代以降、医療の高度化で医療器材の種類は増え続け、滅菌業務も膨大かつ複雑化したため、効率化とともに高い精度が求められるようになってきた。

## 専門職に聞く



昭和49年3月25日  
札幌市生まれ。函館中央病院中央材料室に所属。第1種滅菌技師。

た。病床数の多い大病院は、中央材料室などを設けて行うパターンが多い。EOG(エチレンオキサイドガス)による滅菌が主流で、委託会社に頼むケースが目立つ。道内の大病院は直営三割、委託七割程度。私が勤務している函館中央病院(第1種滅菌技師、二〇一〇年)として、病棟を回って話しているか  
病院職員あるいは委託会社社員の身分で、業務に従事でき、必ずしも資格が必要なわけではない。いわゆる看護助手の位置付けの人が多い。しかし、滅菌に関する知識と技術を有する人材が不可欠なため、日本医療機器学会は認定資格制を設け、二〇〇〇年に「第1種滅菌技師」、二〇一〇年に「第2種滅菌技師」を創設した。「技師」と「技師」は意図的に使い分けしている。  
—どのような人が働いているか  
全国のおおよその認定者は第一種が三百人、道内では第一種認定者は十四人。徐々が増えてきた。私は中央材料室のリーダーとして、滅菌の品質管理や各種マニュアル策定と検証などに取り組む。院内感染制御チーム(ICT)の一員として、病棟を回って話している。

## 患者の安全を守る裏方 感染リスク厳しく管理

所の滅菌物のチェックやアドバイス、院内勉強会の講師なども行っている。当院看護部長が滅菌業務に理解が深く、感謝している。  
—これからの業務のあり方は  
昔々は滅菌するだけで良いという風潮だったが、今は違う。滅菌後、死滅した菌(タンパク質)もきれいに洗浄しなければならぬ。内視鏡の鉗子、人工膝関節の手術器械など、つくりが複雑なものは、より入念に滅菌、洗浄しなければならぬ。最近、新しいものに誕生した手術支援ロボットのダウインチは、どう対応すれば良いか現場から戸惑いの声が上がったものの、創意工夫した手法が学会発表され始めている。  
滅菌に当たって当院の場合、EOGによる作業時間は滅菌に五時間、ガス抜きには十七時間かかる。今春から道内に先駆けて導入したLTSF(低温蒸気ホルムアルデヒド)滅菌装置を活用した場合、滅菌四十五分、ガス抜き五時間半と大幅に時間が短縮され、質が良いと認められた。  
滅菌を行う部署は裏方であり、われわれの業務は診療報酬上に反映されない。しかし、感染対策という医療機関の安全の根本に関わる重要な役割を担っており、やりがいを感じる。  
近隣の医療機関で滅菌業務に従事している仲間とともに、函館滅菌業務研究会を発足した。九月十三日には初の研修会を当院で開く計画だ。さらなるレベルアップに向けて、まい進したい。